

常照

第786号

このこと一つに出逢う②

他と比べる必要のない
独立者としてのいのち
このこと一つに出逢う

清沢満之先生は、「独尊子とは、無畏に住し、不動に安ずる者なり」とおっしゃられます。お釈迦さまが誕生になった時に、「天上天下唯我独尊」と

宣言された、「唯我独尊」という、天にも地にも我一人ということです。そして、無畏に住し不動に安ずるものであると言われました。さらに、「他の衆をおそれ、外物に惑わされるもの、独尊子たるあたわざるものなり」と言われます。これはまさに畏れ無き生活ということです。私たちはいつでも生活に怯え、畏れをもって生きているのではないでしょう。ですから清沢満之先生は、まさに独立者として、唯我独尊として自らの人生を賜ることが、真宗お念佛の教であるところ指摘くださっています。

我が人生として

私たちの人生には、四つの限定があります。一つ目は「経験は一回限り」

ということです。今日という日は再びは来ません。二つ目は「ただひとり」ということです。『大無量寿経』に「身自當之、無有代者」という言葉がありますが、これは身の事実ということです。私がいくら病気をしたとしても、誰もその病気を代わることではできません。身の事実は代わることではできないのです。三つ目は「必ず終わりがある」ということです。つまり、皆さんも私も、最後には必ず死ぬということです。これだけは間違いないありません。そして四つ目は、それが「いつ来るか分からない」ということです。私たちの必ず来る死は、いつ来るかは分かりません。

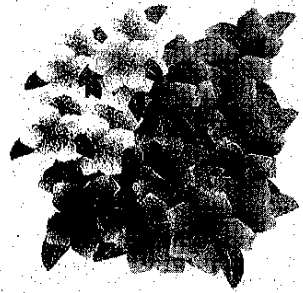
そうすると、いつ来るか分からない終わりに向かって、誰にも代わつてもらえない一度限りの経験を、我が人生

として今生かされているということが、私の事実そのもののなのです。

そういう中で、本来に「正信」という、このこと一つということに出逢っているのかが問われています。親鸞聖人は『歎異抄』で、「ただ念佛して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信するほかに別の子細なきなり」とおっしゃいました。「ただ」というのは、まさに「唯」であり、「このこと一つ」という意味です。『唯信鈔文意』の一番最初に『「唯信抄」というのは、「唯」は、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり。』と親鸞聖人の解釈があり、「正信念佛」とはつまり「念佛そのこと一つといただいております」という世界であると思います。【完】

植物は、太陽の光を求めて上へ上へ競って伸びようとする。そうして育った木々が密集し、うつそうとした森の上には、緑の樹海が広がる。樹海の上からは、まぶしい光が降り注いでいる。

一方、それらの木々の足もとに目をやると、薄暗い森の中でもわずかに光が射し込んでいる。そこでしっかりと大地に根をはり、そんな競い合



いとは無関係なところでしゃんと生きていく植物もある。

人間社会も先を争い、勝敗を競い合う先端で生きる人もあれば、自分の領域を大切に生き生き輝いて生きている人もある。たとえ暗闇の中だと思っても、一点の光明のはたらきにめざめれば、自分も賜った場所で輝いて生きることができる。

いくら落ちこんでも
ここには少し

光がさしてくる

榎本

栄



夏期仏教公開講座
(大谷大学公開講演会)

『人が育つということ』

講師：木越 康 教授(京都大谷大学学長 米国サンフランシスコ生まれ)

日時：令和元年 7月25日(木) PM14:00～16:00

会場：宝泉寺会館 小樽市役所前通り ☎0134-33-3713

会費：無 料 皆様のご来聴をお待ちしております!!

主催：大谷大学同窓会小樽支部

共催：真宗大谷派北第三組 真宗教団連合小樽支部・常照会

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話 (〇一三四) 二二一〇七四番
FAX (〇一三四) 二九一四〇八番
テレホン法話 二七一六一六番

- 七月の常例布教(ご法話)のご案内
- 前期 七月七日(日)～十一日(木)
熊本教区 天草上組 観乗寺
講師 山下 恭 司 師
 - 後期 七月十三日(土)～十六日(火)
四州教区 徳島西組 安樂寺
講師 千葉 恒 乗 師
 - 場所 小樽別院内
 - 時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半
浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院
くださいますよう、お待ちしております。